

記憶を可視化する 山内宏泰の試みー2017樽前arty

門馬羊次

記憶を継承する難しさに直面した時、人々は「風化」という言葉を用いて危機感を募らせる。時間は止まらない。長い月日をかけて雨風にうたれた岩が崩れていくように、記憶は時間に対して、はかなく、もろい。

東日本大震災。未曾有の大災害の記憶ですら、あの日から遠ざかる度に薄れてゆく。宮城県気仙沼市のリアス・アーチ美術館学芸員、山内宏泰さんは、大震災の記憶を可視化する常設展を手掛け、大きな反響を呼んだ。津波で流された市民の日用品を拾い集め、家族の物語を綴った一文を添えて並べた。膨大な被災直後の写真は、生々しい言葉をためらわずに使った長文のキャプションを付けて展示した。被災者も、そうでない人々も、展示を鑑賞することで、日常に潜んでいた記憶が刺激される。あの震災を当事者として意識させるための展示だった。

その山内さんが、苫小牧の西端の樽前で2017年夏に開かれた「樽前arty 2017 三つの展覧会」で「タルマエツムギ」という映像作品を発表した。樽前小の音楽室で上映された約20分の作品。小学校の運動会や地域の祭り、噴煙を上げる樽前山、古びた木造の商店…。樽前という小さな農漁村の日常風景の写真がスライドで流れた。その映像に樽前の古老たちの肉声や透明感のある音楽が重なった。

山内さんが作品全体を構想し、古老たちへのインタビューは展覧会主催者の樽前arty+のメンバーが行った。住民有志はアルバムを引っ張り出して、数百枚にも及ぶ写真を提供してくれた。編集や音楽をディレクションしたのは、苫小牧のアート関係者たちだ。地域外の視点で始まり、地域を巻き込んで紡いだ作品。樽前という小集落の時間を可視化してみると、樽前を知らない鑑賞者たちの普遍的な記憶も呼び覚ました。

山内さんは、なぜ記憶を紡ぐのか。「樽前arty 2017 三つの展覧会」に合わせた2017年夏のインタビューから、その試みの真意を探った。

山内宏泰（やまうち・ひろやす）

1971年宮城県石巻市生まれ。宮城教育大中学校美術教員養成課程修了。1994年にリアス・アーチ美術館（宮城県気仙沼市）学芸員。美術家でもあり、2004年宮城県芸術選奨新人賞（美術・彫刻）。2017年度に震災関連の展示についての論考をまとめた論文で、優秀な博物館研究に贈られる「棚橋賞」を受賞。



タルマエツムギは、もともと自分が取り入れていた仕組みに樽前という地域をはめ込みました。気仙沼では、地元の食文化を中心に地域の魅力を発掘した「まるかじりガイド気仙沼ブック」という冊子を作りました。その中でやってきたことがベースにあって、樽前でも同じ事をやってみては、と考えました。レオさん（樽前arty+代表の藤沢レオ）が以前、気仙沼に来た時に、地元に対してレオさんが薄ら抱いていた危機意識、不安感が重なった気がしました。つまり、いつ消えて無くなるか分からないものが、ずっとあると思ったら大間違いで、それは、突然消えてなくなってしまうかもしれない。そうした事象を収集採集できるのは、消える前にしかできないですね。

自分が作家としても活動をしてきた中で、ベースに抱えてきたことも共通していました。作品は津波で全て流されてしまったけど、「思い出せない風景シリーズ」というタイトルで、地元の消えゆく風景を油絵にしていました。それは当たり前の日常の暮らしの中にある風景。戦前のは我々が暮らしている環境ではほとんどなくなってしまった。自分がこの世を知った時には当たり前で、ふと気づいた時には無くなっている状況。それが、いわゆる風化的な時間の蓄積の変化ではなく、根こそぎ無くなっていくパターンなんです。汚い物、古い物、ぼろい物。それが新しく立派できれいな物に変わっていく価値観があるから、どんどん風景は変わっていきます。それを非常に寂しく思ったんです。

きっかけは、気仙沼より石巻にあるのかもしれませんが。大学入学で生まれ故郷の石巻から離れ、そのうち実家が石巻から東松島に引っ越して。社宅育ちで生家もない。自分の中では悲しい記憶です。幼少期を形成した場所に一步たりとも立ち入ることができないのですから。そんな感覚はずっとある。大人になって石巻に行ってみても、暮らしていた街並みや風景はもの凄く変わってしまっていて。自分が原風景として持っていたはずのものが、みんな無くなっていくんだと、20代中盤に感じ始めて、その寂しさはずっとあったんです。

でも、気仙沼に行くと、すでに石巻では失われていた、どこもなく懐かしい風景が残っていたんです。気仙沼には、ある時代感があったんですね。自分の中でスイッチが入るアイテムというか、質感があるのですが、それはトタンとかサビとか。タールの上に無理矢理ペンキを塗っちゃって、ペンキが黄ばんでしまっている色の質感とか、継ぎはぎだらけの掘っ立て小屋とか。そういうものが、まだまだ山のように気仙沼にあったんです。自分の子供時代の記憶ではトタンは新しい物で美しい自然の風景の中に、どぎつい人工的なブルートタンが張り巡らされていた。あの状況がすごく嫌で、醜いと思えなかった。木造の物を見ると美しいのに、何でもかんでも青いトタンで覆ってしまうのかがっかりしていた。でも、そこに意識が向くきっかけは、絵を小さな時から描いていたからでしょう。小学1年から画塾みたいなところにぶち込まれて。その時に何を描いていたか。まさに自分が暮らしている日常の中の風景を描いていた。その感覚が早い時期からあったからかもしれない。子どもの頃にモチーフになる風景がどんどん無くなっていく。そういう感覚があって、気仙沼に行ってみるとまだ残っていて。でも気仙沼の人は、間違ってもそういう風景を愛してはいなかった。

気仙沼に移り住んだのは、1994年。街はバブルに乗り切れなかったんですね、幸いにも。だから、田舎の風景が残されていた。そういう物を彼らは、「がらくた」と呼んだんです。リアス・アーク美術館2階の民俗資料の常設展示に、あの時代に生き残った日用品だったり、周辺の時代の物を納めて地域の歴史文化

だと解説しようと思ったら、地元の人は「何でわざわざ、がらくた見なきゃいけないんだって」。

日本人は文化と言えば、文化財みたいなものをイメージしてしまいがちですが、自分たちがリアルタイムで生きている時間を文化だとは認識しない。ある民族が生活のスタイルを変えていって、その記録を残していなかったがために、数十年経ってから「ちょっとまずいよね」と言っても生活していないと消えて無くなる。人々はその時に文化が失われたと言うんです。決して特殊な物や習慣だけが文化ではなく、日々の暮らしそのものが文化。特に日本の場合には戦前と戦後では国がまるっきり変わった。自分たちの世代が、また緩やかになじみ始めている日常の風景がどうでもいいものとして消えていくことに抵抗があったんです。そんなことを思いながら、では、その土地にどんなものがあるのか、土地に潜在している文化とか能力を目に見えるようにして再認識していくのかをみんな考え、願わくば経済にも反映させられるようなまちづくりの方向性で考えようと言っていたんです。

そんな矢先でした。あの震災が起きたのは。街が根こそぎなくなった。根こそぎ失って、ようやく気づくんです。あれは失ってはいけないものだったと。国の被災地における政策は、復旧ではなく復興だと。別な新しい物を造る、金出して造ってあげると。そうになってしまうと、我々が掘り起こそうとして次の時代につないでいくものが失われる可能性が高くなったんです。それでも我々は震災前に「まるかじり気仙沼ガイドブック」を作って、それなりに関係者が意識を高めていた。震災後の悪い流れにただ



まるかじり気仙沼ガイドブック表紙

流されることはなかった。でも、もしその準備がなかったらおそらく、どうやって抵抗していかも分からず飲み込まれたんだと思います。

そういう経験をしてきたからこそ、レオさんの声掛けで樽前に来て、ここも永遠ではないかもしれないと。しっかりと継承されながら時代を重ねて変化するのはもちろん正しい文化の進化だとしても、それが何か想定外のことで時間軸が狂ったり、時間の流れが変わったり、そういうことが起きた時に、この土地の記憶、この土地の文化が次世代に伝えられるだろうかという問いかけなんです。そういう意味で今、このタイミングで地域に残された写真を持ち寄って、普通に生きてきて特別に振り返ることのない時間とっていたことを記録する必要があるんじゃないですか、というプロジェクトなんです。

「タルマエツムギ」という名前になったのも比喻表現として文化のでき方、縦軸の時間が変わらない部分と時代ごとにより変りながら積み重なっていく横軸があって、そうやって織物のようにできあがってくるのが文化だと。縦軸は気候風土、人間なら言葉ですかね。



新聞用紙で紡いだ映像投影用幕

気仙沼の自宅があった周辺は、埋め立て地でした。大々的に埋め立てたのは戦後で、造成地の街はほぼ津波にやられました。人間が勝手に川の流れを変え、そして埋め立てて。いざ、陸にして津波が入ったら、かつての川が流れていた場所に津波が流れ込んだ。平然と人は自然の地形を変えたんです。苦小牧でいえば、苦小牧港（掘込み港）は本当はなかった。樽前山が何回も噴火して、それでできた地形もあっただろうし。その土地の生い立ちや歴史、自然の道理というか、そこに沿う形で我々が今、暮らしているだろうかという、そうではないでしょう。自然との関わり方も変わるし、それが緩やかに変わったのではなく、戦後に爆発的に変わった部分が多い。その辺も含めて今、古い時代のことも確認できるように確認した方がいいでしょう。この土地がどういう土地で、人がどう生きてきたか、それが縦軸。そこにある時代に裂き織りのような横の層ができて、そんな映像ができないかと考えたんです。それがコンセプトでした。映像を投影する幕は、新聞紙を使おうと思いました。それを織り上げて投影してみようと。新聞と言えば、日々の出来事を記録して定着させていくもの。苦小牧は紙の街としての関連もあります。媒体としてはおもしろいなと。

今回の映像はあくまで2017年の樽前の上映用の作品です。これで、おしまいではなく、たくさん写真もあって資料編という形で別に編集しておきたいという思いもあります。何年かに一回でも追加していったらいい。この土地の人が学校の地域学習とかに使ってもらえたらいい。地元のことは地元の人が意外と知らないものです。

今回、最初にレオさんに言ったのは、自分みたいなよそ者が、少し滞在したぐらいでなんかやるみたいな、インチキなことではできないからお断りました。でもワークショップみたいなことを通して、地域の皆さんにいろいろやってもらいながら、一個の物を作っていくことはできるんじゃないかと。作家は自分の手

柄を残してなんぼ。人にさんざんやらせて最後は自分が作ったとよく言うんですけど。今回は、自分が何をやっているのか、何もやってないぞと。発案はしたし、種はまいたんですが、全く育ててない（笑）。プロジェクトにするのがいいのかなど。発案によって動き始めたけど、タルマエツムギというプロジェクトになったと。発案者として名前につくけど、全然そんなことはない。紡ぐというところから織り上げて加工するまで連続していけばいいんです。



タルマエツムギを鑑賞する樽前の人

POPARTY (ポナーティ)

住 所／苫小牧市字樽前 114
 ホームページ／<http://tarumae.com>
 発 行 日／平成 30 年 3 月
 発 行 所／NPO 法人樽前 arty プラス
 発行責任者／藤沢レオ
 装丁・デザイン／堀米和克

本誌に掲載されたすべての記事・画像の転載を禁じます。

[POPARTY の由来]

PON：アイヌ語で「小さな」の意。

ARTY：(米) 芸術家気取りの意。

拠点となるアトリエの目の前に流れる「ボン樽前川」というキャッチーながら地域性を感じさせる清流の名から派生した造語であり、樽前 arty の小さな活動という位置づけの文芸論評誌として名付けた。